

俳句通信

特別作品25句 宇多喜代子「冬の海」

特集 わたしにとっての
〈以前の名句〉〈いまの名句〉

- 大石雄鬼 「求めているもの」
 長田群青 「蛇笏・龍太・直人の句を巡って」
 神田ひろみ 「牧車・楳嶺・京子」
 菊田一平 「感情的で強がりで」
 田中重美 「言語と非言語のあいだ」
 谷口智行 「雨と雨音と箸と箸置きと」
 坪内稔典 「作者を読むか、句を読むか」
 西池冬扇 「私の好きな句今昔」
 広渡敬雄 「近ごろ興味・関心のある句について」
 松尾隆信 「念持仏」
 武藤紀子 「私の俳句」



【実力作家30句】

波戸圓旭 「初富嶽」

【追悼】金久美智子

「たおやかな抒情と写生の一瞬」 尾池紫子
 金久美智子50句

【実力作家20句競詠】

木内憲子 「水澄むこと」
 柴田佐知子 「霜の花」
 笙鼓七波 「豺獣を祭る」

●作品● 長木和生・塩野谷仁・中村和弘・染谷秀雄・加古宗俊・小川晴子・直又英一・角谷昌子・水見諒男・

岡山祐子・石井いさお・宮谷晶代・柴田多鶴子・島居真里子・吉田千恵子・山本一歩・上田口差子 ほか

日本の祭り



とんど焼き

東京都



毎年1月8日に行われる東京都台東区の鳥越神社の伝統行事。地域によっては、どんと焼き、どんどん焼きなどと呼ばれることもあるが、鳥越神社では「とんど焼き」と呼ぶ。正月飾りを焚く火で餅を焼き、新しい一年の無病息災を祈る。

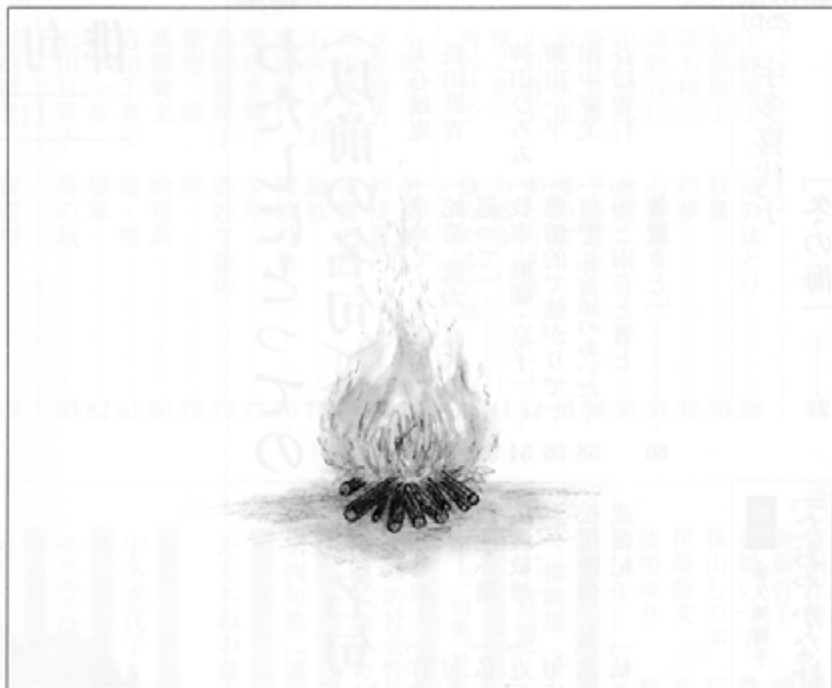


イラスト 田中丸葉子

焚火^{たきび}

焚火かなし消えんとすれば有てられ

高浜虚子

尻あぶる人山を見る焚き火かな

野村喜舟

ねむれねば真夜の焚火をとりかこむ

長谷川素逝

20年ほど前の4月、広島県の山中にあるダム湖に乗っ込みどきのヘラブナを釣りにいったことがある。大物は夜に釣れるとあって、真っ暗な中で竿を出したが、ひどく寒い夜で、練り餌は凍ってぼろぼろになり、針に付けるのに苦勞していた。

そんなとき、少し離れた道の脇で焚火をしている釣り人がふたりいた。そこにわたしはあたらせてもらいにいった。しばらくすると車が2台やってきて、酔った若者が5、6人どさどさと降りてきた。「焚火なんかして、山が燃えたらどうするのだ」と広島弁でいった。それでわたしたちは謝り、すぐに水を掛けて火を消したが、若者の一人がなおも文句をいい続けた、それで、謝り続けていた釣り人も「いい加減にしろ」とどなり返し、一触即発という感じになった。行き掛かり上、わたしは釣り人の側に立って立ちまわりをする気になった。

その気配を察したのか、何人かの若者が文句をいい続ける者を車に押し込んで去っていった。

結局、その夜は大物どころか小物一枚釣れなかった。

(大崎紀夫)

特別作品25句

冬の海

宇多喜代子

生きてきて生きてゆく日の石落の花
十月の終のひと日の空の色
来し方とおもう八十余年の秋
北窓を塞ぐ大事を頑迷に
この卓にみんな居た日の冬薔薇
酔海鼠の小鉢ひとつに雨の音

特集

わたしにとっての 〈以前の名句〉 〈いまの名句〉

名句と思われるものが、時の流れの中で別のものになっていく、ということはよくあることです。それはどういうことか、そして近ごろはどんな句に興味・感心を持っているか、等について11人の俳人に書いて頂きました。

写真：超結社句会第54回会合、2017年10月10日撮影。写真：超結社句会第54回会合、2017年10月10日撮影。



ゲスト 川上昌子・萩野明子

八田夕刈・林いづみ

守屋明俊

ホスト 星野高士・藤本美和子

編集部 超結社句会第54回目です。ゲストは「葉」同人の川上昌子さん、「不退座」同人の萩野明子さん、「鏡」同人の八田夕刈さん、「風土」同人の林いづみさん、「未来図」同人の守屋明俊さん。今回は今年最後の句会でもあり、ゲストが5人です。ホストは「玉藻」主宰の星野高士さん、「泉」主宰の藤本美和子さんです。遠慮のない意見交換をお願いします。高士 ずいぶん点が割れましたね。3点が最高点で6つ。1点が多いですね。採った人、採らなかった人のご意見を伺いたいと思います。ご自分の句でも自分の句だと分らないように意見を仰ってください。まず、3点句から。

茶の花や仕立て直しの糸を引く

昌子

昌子 「仕立て直し」と「茶の花」の洪さの取り合わせが、なんとも言えない組み合わせだと思って頂きました。

夕刈 「仕立て直しの糸」には仕立て直した喜びが感じられて、真白な糸と「茶の花」の取り合わせがよいと思いました。「茶の花」は地味な花ですが、どこか凛としたところもあって、「仕立て直し」とよく呼応しているような気がします。

明子 古風なもの同士を合わせたというところが、離れてはいるんですが、そこから丁寧な暮らしが想像でき、先ほ